

環ハイレギュラース

佐伯瑠伽

Ruka Saeki

立ち読み専用

この立ち読み版は製品版の1～44頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

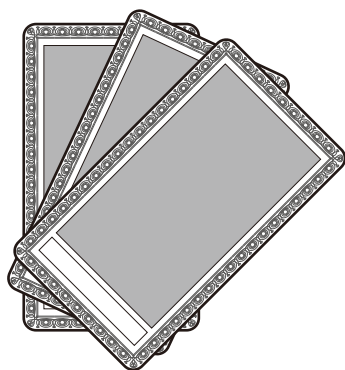
中央公論新社

目次

第一章	感染	7	第十一章	白昼	139
第二章	蔓延	16	第十二章	揭示板	147
第三章	疫学	25	第十三章	魔法少女	155
第四章	介護者	45	第十四章	記憶検索	169
第五章	ザ・モーニング・アフター	58	第十五章	エディター	183
第六章	サリーとアンのテスト	64	第十六章	罪状	189
第七章	行動操作	77	第十七章	社会見学	198
第八章	ワクチン	87	第十八章	コーチャー	204
第九章	夕景 せうけい	104	第十九章	新局面	217
第十章	ザ・ゲーム・イズ・アフット	119	第二十章	踏み切る	225

第二十一章	街頭
第二十二章	接客
第二十三章	カウンターマーチ
第二十四章	籠城
第二十五章	七十六票の男
第二十六章	紅涙
第二十七章	最高の隠し場所
第二十八章	意外な動機
第二十九章	啐啄 そつたく
第三十章	捕食者

316 304 294 288 282 276 266 247 238 234



第三十一章	蜘蛛女のキス
第三十二章	百年の孤独
作者からひとこと	

359 343 318

環ハイレギュラーズ

第一章 感染

光ケーブルの中心軸上をつきぬけて、もうひとつのサーバーへ刑事は跳んだ。しかし遅かった。おそらく数ナノセカンドの差で、脱獄囚はもうそのサーバーにはいなかった。かすかな臭跡をたよりに、刑事は第三のサーバーへ跳んだ。その郊外地区の、電柱から電柱へ架けわたされた回線上で、光速度での逃走と追跡が続いた。

あるサーバーで脱獄囚はフェイントをかけ、ふたつの回線に臭跡を残した。刑事はほんのつかのま判断に迷い、脱獄囚にわずかな猶予を与えた。その十数ナノセカンドの隙をついて、次のサーバーで脱獄囚は変調をとげ、有機体ジャンプを敢行した。そのサーバー上のあるサイトにアクセスしていた複数の有機体のひとつに跳び移ったのだ。

こうなったら刑事もジャンプするしかない。脱獄囚はすでにトラップを張っているにちがいないから、同じ有機体に入ることはできない。サイトにアクセスしているそれ以外の有機体の意識表層を、刑事はすばやくトレースした。

ある個体が心に強く描いているイメージが刑事の興味を引いた。この個体ならば上書きせずにも公算が大きい。

有機体感染モードに変調をとげると、刑事はジャンプした。

※

一月五日の火曜日、つまり文化の日の振替休日の翌日、我妻喚子は、授業が終わるとすぐに徒歩で帰宅し、自室のパソコンの前にすわった。メールをチェックしたがスパムばかりだった。喚子は友達が決して多くない。そこで、お気に入り登録してあるサイトを、いつもの順番で巡回していった。

喚子は東京都立城西高校の二年生である。城西高校は井ノ頭通り沿いにあり、杉並区南荻窪一丁目にある喚子の自宅からは、徒歩で二十分である。城西は名前の通った進学校だが、喚子の成績はほぼ真ん中、進路でいえばW大の文学部に届くか届かないかくらいである。

喚子は身長一五七センチ。どちらかといえば痩せていて、はつきりいえば姿勢が悪い。首がちよっと前に出て、背骨のカーブに後方へ反った部分がない感じだ。顔の造作は、整っていないではないが、いかんせん表情にとぼしい。部活はやっていない。人づきあいは苦手。かなり重度のコミュニケーション障害である。

喚子は、オタクである。ウェブと、ゲームと、ラノベと、マンガと、同人誌即売会で生きている。ひとりっ子なので六畳間サイズのフロリングの部屋をあてがわれているが、それをいわゆる汚部屋にしている。ドアを開閉する四半円の空間と、そこからノートパソコンを載せた学習机

に至る肩幅ほどの通路をのぞいては、脱ぎ捨てた衣服や、新古書店で買った袋のままの文庫本や、揃いや端本のコミックや、うずたかく積み上がった同人誌や、いつ使うやらわからぬ文房具などが、膝の高さまでの空間を埋めていて、ところどころ腰の高さに達している。典型的な片づけられない女子の部屋である。

高校に入ってからはこの部屋の状態について両親は何も意見しない。父親はある注文住宅メーカーの管理職で猛烈に忙しい。母親は専業主婦だが細かいことにこだわらない。区立天明中で喚子がそこそこの成績をおさめ城西に合格した時点で、両親ともある安心感を抱いたようで、喚子はその自室に一定の治外法権を勝ちえた。

いくつかのサイトを巡回したあと、喚子はパスワードを入力し、二年B組の裏サイトにアクセスした。

二年B組の裏サイトは、進学校のことだから、ごく穏健である。つまり、教師の管理下にないというだけで、ほとんど裏サイトの名に値しない。二年B組の生徒は三八人しかいないから、匿名性はないにひとしい。しかも進学校なので、いじめも、ハブもない。社会常識にとほしいいわゆるDQN（どきゅんと読む）もない。誹謗中傷や個人情報曝露などもほぼゼロだ。だから、クラスの誰もががかならずアクセスする、というようなサイトではない。

なにしろ、管理人が入沢和樹だ。コンピュータには強いが、まるつきり常識人であり、そういうアンダーグラウンドを許さないとこがある。毎月几帳面に、新しいパスワードがメンバー（ほぼクラス全員）にメールされてくる。サイトにアップされる内容は、教師のゴシップ、テレ

ビドラマやアニメの感想、ゲームの話題。質問すると、誰かが答えてくれる確率がかなり高いのでなかなか便利である。この時間ならばアクセス数はかなり多いはずだ。ちなみに、喚子はいっさい書き込みをせず、もっぱらROMに徹している。

アニメの感想のスレッドを漫然と見ながら、ぜんぜん別のことを考えていたとき、それは起こった。マウスに載せたてのひらに、突然しびれるような感覚が走った。反射的にマウスから手を放したが遅かった。すでに、何かが喚子の中に入りこんでいた。

なんとも名状しがたい違和感が、たちまち全身にひろがった。痛くはない。苦しくもない。呼吸も普通にでき、手足も自在に動かせる。だがその違和感には、喚子に、これは緊急事態だと思わせる何かがあった。しかもまったなしの、締切のある緊急事態だ。その締切がきたとき、私はもう今の私ではなくなってしまう。

突然、喚子の目の前、パソコン画面とのあいだに割り込むかたちで、縦一列に、三つの灰色の長方形が出現した。

三つとも同じ大きさ、同じ形状だ。縦横比はだいたい七対四。もしかして、これ、タロットカードの絵札？ 四隅は丸く切り取られ、絵の入るスペースには四角い枠線が引かれ、枠内の画面はいちめんの灰色である。下辺にはカードの名前を印刷するスペースがある。「魔術師」とか、「皇帝」とか、「恋人たち」とか、「世界」とか。今のところ何も印刷されていない。

喚子は手を伸ばしてカードに触れようとしたが、指はカードをつきぬけて、つきぬけた指先だけ見えなくなった。引き戻すと指先はまた現れた。

カードは実在物ではない。おそらく自分だけに見える。

これはメッセージ。解読しなければ、たぶん私の身には、とてもヤバイことが起こる。

意識を集中すると、それぞれのカードの四角い枠線内に、ほんやりと絵柄が見えてきた。何だかはつきりしない。幼いころ、母の実家で、祖父が年代物の映写機で漆喰壁に映して見せてくれた昔のスライド写真のようだ。次々と絵柄がいかわり、ピントも合ったりはずれたりする。ごく明晰にある特定のイメージが映ったかと思えば、次の瞬間には朦朧とした別のイメージがとつてかわる。

三枚のカード上に次々に交替するイメージを見ているうちに喚子にはシステムがわかってきた。一枚一枚のカードには、あるキーコンセプトが乗っている。そしてカードは、それに関連のあるイメージを、喚子の脳内から検索して、映しだしているのだ。つまり、連想ゲームだ。

そう気づいたことで即座に、喚子は三枚目のカードの答えがわかった。

城西高校生徒手帳の写真、天明中の卒業アルバムの写真、七五三の晴れ着の写真、すべて被写体は喚子自身である。

つまりこのカードは「我妻喚子」だ。あるいは二人称「お前」だ。おそらく目的格「お前を」だ。

そう思った瞬間、いちばん下のカードが一瞬消えてまた出現した。カード名スペースが、「我妻喚子」の四文字で埋まっていた。そのフォントは、喚子がいつもエディタで使っているMS明朝である。ために、MSゴシックに変えろ、と念じてみたらその通りになった。

なるほど、このスペースは、こちらが心覚えに書きこめるメモ欄なのだ。

さて、三枚目が「お前を」だとすると、一枚目は「私は」ではないか。喚子は一枚目に意識を集中した。

そこに映るイメージは、なぜか映画やテレビの俳優だった。全身像もあれば半身像もある。ふたり並んでいるものも、七人並んでいるものもある。大部分男優だが、女優もある。すべて同一ジャンルの作品の配役だったから、これも答えは自明だった。確信すると同時に、一枚目のメモ欄に「刑事」のふた文字が入った。

さて、となると二枚目は動詞だ。ところが二枚目のカードのイメージは、一枚目、三枚目と違って、次々交替することがなかった。同じひとつのイメージがずっと映りつづけている。

それは、昨夜作成し今日提出した世界史のレポートの編集画面だ。

このレポートがどうしたというのか。喚子は画面を見つめた。

喚子が使っているのはミズキエディタというフリーソフトだが、いつもとは何かが違う。そう、カーソルだ。

いつもは挿入モード（さうにゅう）で書くから、カーソルは入力マスの左辺上の太い一本の縦線だ。しかし今このエディタのカーソルは、入力マス全体を覆う小さな四辺形である。つまり、エディタは、上書きモードになっている。

すると、答えは「上書き」？ 全体の意味は……、喚子は口に出して言ってみた。

「私こと、刑事は、お前こと、我妻喚子を、上書きする」

その瞬間、三枚のカードは消えて、一枚のカードが現れた。絵柄スペースはいちめんの純白だった。つまり、空白の灰色ではなくて、ウェディングドレスのように鮮やかな白。

これはもしかして「正解」ってこと？

いや、その前に、これって、双方向なの？ つまり、私が口に出して言ったことは、この相手に、通じるの？ 喚子は口に出して言ってみた。

「私が、口に出して言ったことは、あなたに、通じるの？」

ふたたび純白のカードが出た。「白」

喚子は声に出して言った。「っていうか、私の考えることは全部、そっちに通じてるのね」

「白」

喚子はさらに声に出して言った。「上書きって、なに？ 上書きされたデータって、普通、消

えてしまうわよね。私、これから、あなたにのっとられて、消えてしまうというの？」

「白」

えええええ！ 喚子はうろたえた。これは無茶だ。第一章からそんなに理不尽な話、小説でもマンガでも、読んだことがない。

「それはいやよ。私は消えたくない」

「白」

「消えたくないければ、私はどうしたらいいの」

三枚のカードが現れた。

一枚目のカードは「我妻喚子」だった。つまり、この文は命令文。お前は何々しろ、というわけだ。

二枚目のカードを解くには一分ほどかかった。野球のクロスプレーとか、カトリックの聖職者叙任の按手とか、昔のアニメの女主人公とか、いろいろなイメージが交替した。

「意味はタッチ、つまり、『さわる』ですか」

「白」

そして三枚目のカードは、表示された瞬間から、実は喚子にはある人物を指すことがわかってきた。

「私が、このひとの身体にさわったら、私は、消えずにすむ、というのね」

「白」

「期限はあるの？ 私はあとどれくらい、上書きされずにいられるの？」

四枚のカードが現れた。そのうち三枚は同じ絵柄だった。立方体。その三つの面がそれぞれ一〇×一〇の柵目に区切られている。これは喚子にもすぐにわかった。一〇〇〇だ。カードが三枚で、三〇〇〇。

四枚目。病院の集中治療室、患者につながれた機械が表示するバルス。「脈拍・鼓動」

「いま現在の、私の脈拍が、三〇〇〇回拍つあいだ、つまり三十分強？」

「黒」

そして、カードが一枚減った。「一〇〇〇」「一〇〇〇」「脈拍・鼓動」

「つまり、私はもう十分間使ってしまったから、残りは二十分間というわけ？」

「白」

ケータイ！ いや、ダメ、あの人のケータイもメアドも知らない。ろくにことばもかわしたことがない。けどスケジュールはだいたいつかんでる。たぶん、あのへん。

喚子は階段を駆けおり、脱兎だつとのように家を飛びだした。部屋にいたままの姿だ。コートを着る暇さえ惜しい。

時刻は五時三〇分、すでに外は真っ暗である。

第二章 蔓延

「環八の並木の樹種はアメリカカフウだ。商店街のところだけはトウカエデだ」

五時四五分。城西高校二年B組の生徒、神奈邦治は、弟の泰弘を連れて、善福寺川緑地公園を急ぎ足で歩いていた。善福寺川の右岸に沿って作られた遊歩道を下流に向かっていく。荻窪一丁目の自宅から、浜田山のファミレス「ネイサン」に向かう途中である。邦治はとぎれとぎれに泰弘に話しかけている。

「五日市街道の並木はハナミズキだ。井ノ頭通りの並木はエンジュだ。夏は花がみごとだよな」
泰弘は答えない。聞いているのかいないのか、いつさい反応はなく、邦治と目を合わせることすらしない。しかし兄といっしょにいて、兄の声を聞いているのは快いらしく、のどから低く、連続的に曖昧母音を発する。これは上機嫌の証拠である。ときおり顔に満面の笑みを浮かべる。これから「ネイサン」に行くのが嬉しいのである。

「エンジュは中国原産で、日本ではサビ病にかかる。幹が紡錘状にふくらむ。そのためか、このあいだから植え替えが進んでる。植え替えられたのは何の樹だろうと思っていたが、花が咲いたらわかった。ヤマボウシだ」

泰弘は重度の知的障害者だ。生まれてこのかた一度も有意語を口にしたことがない。医師の診断は自閉症。東京都療育手帳（通称は「愛の手帳」）という身分証明書の交付をうけている。判定は「総合判定二度、合併障害無」である。

邦治と泰弘は二卵性双生児でふたりとも長身で体格がいい。それでも泰弘は幼少時に摂食障害があったので、邦治よりやや細身、細面で、障害がなければ女子がほっておかないような美少年である。

「泰弘、機嫌がいいな。お前、ハッピーなのか？」

邦治の口癖である。知的障害という大きなマイナスを背負った泰弘のために、父親や、自分や、特別支援学校の先生や、ヘルパーさんたちが、公的補助をもらい、さまざまな犠牲^{ぎせい}をはらって、介護サービスをしている。それで差し引き少しでもプラスになっているのか。そのことを泰弘の口から請け合ってもらえたらどれだけ救いになるだろう、と邦治はいつも思うのである。

もちろんいつもと同じで泰弘は答えない。低く、連続的に曖昧母音を発しているばかりである。泰弘の横顔から前方の闇に視線を移した邦治は、同じ川端の道をこちらに歩いてくる人物に気づいた。公園灯の光の中に入ったので、知っている人物だとわかった。二年B組のクラスメート、倉橋茜^{くらはしあかね}だ。身長一七〇センチちよつとのモデル体型。邦治と泰弘は私服のマウンテンパーカーだが、茜は制服姿だ。邦治の幼なじみで、小学校、中学校も一緒、泰弘のこともよく知っている。「おーい、茜」邦治は手を振って笑顔をつくった。

茜も笑顔になり、挨拶^{あいさつ}をかえした。「邦治。泰弘くん」

互いの距離がちぢまり、やや声を張って話しかけようとしたとき、邦治は、視野の右隅にある動きをとらえた。自分の右手、五日市街道方向の闇の中を、誰かがこちらへ息せききって走ってくる。公園灯の光がこの第四の人物を照らし出した。白いTシャツにカーディガンの女子……。

「我妻さん？」

三〇メートル前方で、神奈邦治が、突然向かって左方向へふり向いて身構えたので、倉橋茜はその視線をたどった。闇の中を、人影が、邦治と、その弟の泰弘のいる方へ急速度で近づいていく。走っている。走り慣れていない女子が必死に走るときの、今にもつまづいて転びそうな走り方だ。公園灯に照らされた瞬間、横顔で誰だかわかった。二年B組のクラスメート、我妻喚子だ。呼びかけた。

「我妻さん！」

だが喚子は茜には目もくれず、邦治と、その弟の泰弘の方へ突進していく。その表情は必死で、ただごととは思われない。

何か、邦治にうらみでもあつて危害をくわえようというのか、と茜は直感し、とっさに学生力バンをその場に捨て、全力疾走で走りだした。我妻喚子と、泰弘をかばう邦治とのあいだの距離がみるみる詰まる。

一瞬早く、茜は割って入り、喚子の前にたちふさがった。しかし茜は、喚子のねらいは邦治だと思いこんでいたので、泰弘に向かう喚子の動きを止められなかった。邦治の腕をかくくつて

喚子は泰弘に迫り、状況がのみこめず立ちすくんでいる泰弘の手をとった。邦治はそれを止めようとして横手から、茜は後方から、喚子の胴体に手をかけた。

喚子に触れたその瞬間、右のてのひらに弱い静電気のようなものが走るのを茜は感じた。喚子の身体その部位からてのひらをぬけて、何かが自分の中に入ってきた。

だが今はそれどころではない。邦治が喚子の両肩を後ろから両手でつかまえ、泰弘から引きはがした。喚子は泰弘の両手首を自分の両手でしっかりと握っていたが、素直にそれを放して、邦治の胸に背中をあずける体勢になった。

茜は泰弘にかけよって、外傷がないか確認した。大丈夫だ。喚子の手には刃物のたぐいはない。体当たりしたわけでもない。全速力でかけよって、手を握っただけなのだ。

「我妻さん、これはいったい……」

と問いかけた茜は、喚子を抱きすくめた邦治の顔に驚愕きょうがくの表情が浮かんでいるのに気づいてことばを中断した。茜は邦治の視線をたどり、それが泰弘の顔に注がれているのを知り、そして彼女自身も驚いた。

泰弘が、邦治の顔を、正面から見つめていた。

決して他人と一瞬以上目を合わせようとしなはずの泰弘の視線が、邦治の顔に向けられ、そこに定まってびくとも動かないのだ。表情もきりつとして不動である。いつものように不安定にゆらいではない。

うわー、泰弘くん、イケメンだなあ、と、思わず茜は事情を忘れて見はれてしまった。

だが邦治は真顔で泰弘に呼びかけた。「泰弘、お前、どうしたんだ」

泰弘は答えない。邦治と視線を合わせつづけている。

邦治は後ろから抱きすくめていた喚子の身体を、やや乱暴にぐるりと半回転させ、その顔を正面から見た。

「我妻さん、オレの弟に何をした！」激しい怒気をおびて質した。「これは泰弘じゃない！」

邦治、ほんとに怒ってる。茜はちよつと感動した。ほんとうに、泰弘くんのこと、大事に思ってるんだ。

だけど、我妻喚子はちよつと、いや、かなりコミュニケーション。そのやり方では話は前に進まない。

そのとき、邦治の腕の中で、喚子がふるえだした。その細い身体は、ほとんど荒々しく痙攣した。全力疾走したあとだというのに、顔面がみるみる蒼白になった。

何かの病気の発作かと茜は一瞬思ったが、ちがう。これは恐怖だ。この子、よつぱどこかい目にあつたんだ。

「邦治、ちよつと待って」

茜はつかつかと歩み寄って、喚子のふるえる身体を邦治から引きはがし、自分の胸に抱きとつた。茜の胸のふくらみがちよつと喚子の両頬に当たつた。

「泰弘くんの様子が変なのは私にもわかる。だけどいったん落ち着いて。女の子をどなるのはダメ」

邦治がうなずいた。喚子の異状に気づき、すでに冷静さをとりもどしている。

「わかった。我妻さん、思わず大きな声になった。悪かったよ」

「この場はあたしに仕切らせて。こういうことは、あたしの方がうまくやれる」

邦治の顔に安堵^{あんど}の表情が浮かんだ。

「茜、きみが居合わせてくれてよかった。よろしく頼む」

茜と邦治は幼なじみだから、互いの得意不得意を熟知^{じゅくち}している。邦治はおそろしく頭がいいくせに、人間を相手に場をまわして話を進めるのは苦手だ。その面の能力はA～Eの五段階評価でせいぜいCプラス。茜は自慢じゃないが余裕のAプラスである。

「たぶん立ち話ではすまないから、場を移しましょう。だけど、まだ我妻さんが一度も発言していないわ」

抱いていた喚子を少し離して、おもむろに膝を折って目の高さを合わせ、声を和らげて話しかけた。

「我妻さん。神奈くんはさっきあなたに訊^きいたわ。あなたが、神奈くんの弟の泰弘くんは何をしたのか、って。その質問への答えとして、今この場で、簡潔に話せることはあるかしら」

沈黙。だが我妻喚子はコミュ障。この沈黙を黙秘^{もくひ}とするにはまだ早い。何か言おうとしている心配がある。

茜は表情を和らげて、待った。

十数秒の沈黙ののち、喚子は邦治の顔を見て、口を開いた。

「弟さんは、今、私の中に、いると思う」

邦治と茜は顔を見合わせた。

「私の中に、私と、弟さんが、両方いるの。そうして、私にとりついてたものが、出ていって、今、弟さんの中にいる。あの、倉橋さん」

喚子の視線が、茜の下腹に釘付けになっていた。制服の、ブレザーの、いちばん下のボタンを、食い入るように見ている。当然だが、茜ははずして着ている。

「その、いちばん下のボタン、はめて。そうしないと、私の中の弟さんが、あなたにつかみかかってはめちゃうと思う」

数秒の沈黙ののち、邦治が静かに言った。

「茜、それならば、ほんとうなんだ」

手術台の前の執刀医のような口調だ。茜は昔からよく知っている。この口調が出たときの、邦治の頭の柔らかさと回転の速さは、ほとんど掟おきてやぶりだ。

「信じられないが、信じざるをえない。自閉症者はほとんどかならず何かに『こだわり』をもっているが、その中身はひとりひとり千差万別だ。泰弘だけのこのこだわりを、泰弘とは初対面の我妻さんが知っているはずがない」

突然、泰弘が動いた。三人に歩み寄り、右手で邦治の手をとり、左手で喚子の手をとり、その両手で茜の手をはさみこんだ。

四人のあいだに身体的接触が成立したその瞬間。茜の目の前に、三つの長方形が出現した。邦治と喚子の表情から、かれらにもそれが見えていることがわかった。

喚子が言った。「これが、私にとりついていたものの、伝達手段なの。じつと見てると、意味がとれる」

三十秒後、喚子は解読した。「意味は、上から『刑事』『提案』『意思疎通』」
通訳した。「『話し合おう』って言ってる」

※

同日午後六時、杉並区宮前一丁目のマンション。

まえしまさと
前島真人が帰宅し、出迎えたヘルパーさんに挨拶した。

「いつもお世話になります」

「晚ごはんの介助はすみました。今、眠っていらつしやいます。それでは、私はこれで」

前島と入れかわりに、ヘルパーさんはひきあげていった。

前島は、健たけの部屋のドアをそっと押しあけ、室内の様子を見た。暗闇の中、常夜灯と、ベッドに渡した板の上のパソコン画面だけが光源である。OSのデスクトップの青色が反映して、健の顔はいつにもまして生氣なく見えた。

前島はパソコンをシャットダウンすると部屋を出た。ヘルパーさんの作っていた料理をレンジで温めて、夕食をとった。妻の満代みつよが癌がんで亡くなってもう十年になる。

健は十七歳。病名は伏せるが難病である。満一歳近くになってようやくかまり立ちをはじめ、

手を放して歩くようになったと思ったら、ある日突然立つてもいられなくなった。続いて免疫不全の症状がはじまった。成長するにつれて重くなっていく病気で、患者の多くはたち前後で命をおとす。

保因者は人口の〇・五から一パーセント、実際に発症するのは一五万人にひとりといわれる。

なぜ、それが、健でなければならぬか。

たまらず、箸^{はし}を置いた。

そうでなく、してくれるなら、俺は悪魔に魂を売り渡すかもしれない、と前島は思った。

第三章 疫学

一月五日、午後六時四五分、神奈邦治は、弟の泰弘、倉橋茜、我妻喚子とともに、自宅一階のダイニングの食卓を囲み、コンビニ弁当の夕食を終えつつあった。

「まず、ごはんを食べるの」と主張したのは茜である。「中学以来、生徒会活動歴五年の経験からいうと、ごはんを食べずに開いた会議で決めたことは、かならずあとになって、そんなことは決まっていなかったと、議論をむしかえす人が出てくる。そうしてそれは、執行部にとっては、いちばんあつてはいけないことなの」

邦治は泰弘に注目した。泰弘はいつもどおり握り箸を器用に操って、コンビニ弁当をほぼ食べきっていた。いつもとちがうのは、生野菜と香の物を食べ残していないことである。その一方で、喚子が生野菜と香の物を食べるにあたっては、内なる泰弘とかなり悶着もんちやくがあつたようで、結局、半分以上食べ残した。

神奈家は、荻窪一丁目、古くは西田町にしだといった一角にある、築二十年の一戸建て二階屋で、西田小学校と松溪中学校しょうけいからほど近い。

神奈兄弟の母は兄弟が中二の秋に病死して、今は父の神奈昇のぼると三人暮らしである。昇は大学

教授だが、今日は会議日で帰宅が遅い。

茜と喚子はそれぞれ自宅に電話して、急な事情で外食すること、勉強会で遅くなることを報告した。茜に言われて、邦治は母の遺品の中から、アノラックのコートを出してきた。喚子が帰宅時に着る用である。

弁当がらを片づけ、食卓の上に何もない状態にして、茜は邦治と泰弘をキッチン側にすわらせ、自分と喚子はリビング側にすわった。

茜が喚子に質した。「手を触れあっていたれば、こっちの考えは、口に出さなくても、その、刑事さんに伝わるのね」

「そう」喚子はうなずいた。

このとき、邦治の脳内に、ある古い歌謡曲の冒頭の一節が流れたが、記すとJASRACの課金が発生するので割愛する。

「つまり、刑事さんは僕たちの心が読める」邦治は発言した。「あのタロットカードは、刑事さんが、刑事さんの心が読めない僕たちのために使う、いわば、手話みたいなものなわけか」

「そういうことみたいね」茜が指示した。「邦治、泰弘くんの手をとって、テーブルの真ん中に置いて」

邦治は右手で泰弘の左手をとって差し出した。茜が左手で喚子の右手をとってその上に重ねた。「刑事さん、これで、意思疎通、とれていますか」

純白のタロットカードが、邦治の目の前に現れた。「白」

「それでは、倉橋茜が議長をつとめます。アジェンダは、議題一、刑事さんとの意思疎通、議題二、我妻さんの現状評価と対策。これでいいですか」

「異議なし」邦治は言った。喚子はいわずき、刑事は「白」のカードを出した。

「それでは我妻さん。今日あなたの身の上に起こったことを話してください」

喚子は話した。音量はやや不足、滑舌^{かつぜつ}やや悪く、嚙^かんだりとちったり、話し方は訥々^{とつち}として進んだり戻ったりしたが、話の内容は過不足なく、簡潔にまとまっていた。

邦治は喚子の評価を少し変えた。喋り慣れていないだけで、この人、頭はいいんだ。確かに、この判じ物テレパシーの解説にあと数分余計にかかっていたら、制限時間内に自分と泰弘に追いつけず、この人は今ごろこの世にいなかったはず。

喚子が話し終えると、茜は泰弘に向きなあった。

「今の我妻さんの証言について、刑事さんに確認します。刑事さんは我妻さんのような普通の人間にのりうつった場合、三十分たつとのりうつった相手の人格を『上書き』してしまう。ただひとつ例外が泰弘くんのような自閉症者の場合で、その場合にかぎり、相手の人格を『上書き』することなく、身体から追いだして第三者の身体に避難させることができる。この理解で正しいですか？」

「白」

「あなたは我妻さんの心を読んで泰弘くんの存在を知った。だから我妻さんにのりうつって自分を泰弘くんのところへ運ばせた。しかしその結果、あやういところで我妻さんを『上書き』する

ところだった。つまり我妻さんの人格を消滅させる危険を冒した。そう理解していいですか」

「白」

「あなたはあなたの目的を達するためにそうする必要があったわけですね」

「白」

「たとえそうとしても」茜は語気を強めた。「あなたが我妻さんをたいへんな危険にさらしたことは間違いないありません。議事を進める前に、あたしはあなたに、我妻さんに対し陳謝ちんしゃすることを求めます」

すげー、と邦治は感嘆した。さすがは茜、あっぱれな度胸だ。未知の憑依生物ひよういとのファーストコンタクトで、いきなり相手をあやまらせにかかったよ。

そりゃーそうよ、と邦治のアイコンタクトに答えた茜の表情が語っていた。意思疎通がとれないなら別だけど、とれるんだからここはまずあやまるのが順序。話はそれからよ。

二枚のカードが出た。「刑事」「新しいカード」

新しいカードはまだ灰色のままだったが、文脈からして「承諾」だろう。泰弘は喚子に向きなおし、正面から顔を見て三枚のカードを出した。

「刑事」「また新しいカード」「我妻喚子」

邦治はあつけにとられた。刑事さん、未知の憑依生物のくせに、あやまっちゃったよ。

真剣な表情で喚子にあやまる泰弘を見ているうちに、突然邦治は鼻がつんとして、涙が出そうになった。刑事さん、あんまりだ。まるで、泰弘が、健常者になったみたいじゃないか。障害者

の家族に、これはないよ。もれそうになった鳴咽^{おえ}を、邦治はかみ殺した。

「刑事さんから陳謝がありました。当事者である我妻さんが陳謝を受けいれるかどうかは別問題として、これで議事を進行させることができます」

茜は続けた。「もうひとつ、要求があります。あなたは今、神奈泰弘くんの身体の中にいて、我妻喚子さんの身体の中には神奈泰弘くんの人格が同居しています。そこで原状回復を要求します」語気を強めた。「泰弘くんの人格を、泰弘くんの身体に戻して、我妻さんを、解放してください。そうするとあたしたちのあいだの関係はずっと簡単になります」

「刑事」「黒」「さっきのカード（つまり『承諾』）」

「拒否、ですか」眉をひそめた。「それは、刑事さんと泰弘くんの人格は、泰弘くんの身体の中で同居できないからですか？」

「茜」邦治は注意した。「否定疑問はだめだ。答えの解釈が曖昧になる」

「そっか」言いなおした。「あなたは泰弘くんの人格と同居できますか？」

「白」

「つまり、できるけれど、する意志がない？ もとい、する意志はありますか？」

「黒」

「それはなぜ？ 説明してください」

「刑事」「新しいカード」「邦治」「茜」「喚子」「別の新しいカード」「刑事」

「複文だな」邦治は意識を集中した。三十秒後「二枚目は、『要求』か『要請』だね」

「後ろから二枚目は、『ヘルプ』とか『協力』だと思わ」喚子が読み解いた。

何を協力しろというのか、と茜が問う前に、刑事は説明を続けた。

「刑事」「黄緑の色カード」「泰弘」スペース「泰弘」「黄緑」「喚子」

「黄緑の色カードの正確な意味はさておいて、言わんとするところは明らかだ。刑事さんの泰弘の身体に対する関係は、泰弘の人格の我妻さんの身体に対する関係と同じだ、というわけ。つまり、現状の叙述だね」

二枚のカードが、今度は左右に並んで出た。「左右に並べた、ということからすると、これは、文じゃない。それぞれにカードの意味をとってみろ、というんだ」

三十秒ほどで喚子が答えを出した。「『生』と『死』」

とてもいやな予感が、邦治の心をよぎった。

「刑事」「黄緑」「泰弘」スペース「赤」「泰弘」「生」

「新しいカード」「黄緑」「泰弘」スペース「赤」「泰弘」「死」

三人は、二行目先頭の新しいカードを注視した。また喚子が最初だった。「『無』か、『ゼロ』だと思わ」

「刑事さん、つまりこういうことか。『黄緑』は『包含される・中に入っている』。今、泰弘の身体は、中に刑事さんが入っているから生きているが、刑事さんが出ていってぬけがらになったら死んでしまうというのか」

「白」

さらに新しいカード縦列が出た。

「邦治」「茜」「喚子」「協力」「刑事」「スペース」「赤」「刑事」「黄緑」「泰弘」「スペース」「泰弘」「生」

「邦治」「茜」「喚子」「協力」「刑事」「スペース」「緑」「ゼロ」「黄緑」「泰弘」「スペース」「泰弘」「死」

「わかった」邦治は言った。「赤と緑は補色、つまり対^{たい}になる概念だ。つまり、赤が『AND』で緑が『OR』。だから、全体の文意はこうだ。お前たちが俺に協力すれば泰弘の身体は生かしておいてやるが、協力を拒めばぬけがらにして死なせてしまうぞ」

「白」
「人質をとって協力を迫ってきたわけ？ さっきは紳士的に陳謝したのに。キャラが支離滅裂だわ」

「茜、どうすべきだろう」邦治は茜を見た。

「あたしの五年間の生徒会活動歴にも、人質事件の交渉をする機会はなかったわ」茜は少し考えた。「だけど、こちらに人質を実力で取り返す^{じようせき}べきがないんだから、仕方がない。定石^{じようせき}は、協力の内容を聞くことでしょうね。刑事さん、あたしたちに、どういう協力をしろというの？」

新しいカードが出た。

「刑事」「新しいカード」「別の新しいカード」

「二枚目、たぶん『追跡』」喚子が読み解いた。

「すると、三枚目は目的語で『犯罪者』？」

「いや、ステイーヴン・キング原作の映画がちらちらする。『脱獄囚』じゃないかな」
カードがくわわった。

「刑事」「追跡」「脱獄囚」「新しいカード」「同じ新しいカード」

「刑事」「追跡」「脱獄囚」「同じ新しいカード」

「新しいカードは意味がすぐわかった。『インターネット』ないし『ウェブ』だ。だけど文意はわからない。なぜ、二行？　そして一行目が二回、二行目が一回なのはなぜ？」

一同は考えたが見当もつかなかった。

「そもそも」と邦治は言った。「一行目に、ウェブが二回出てくるのがわからない。だって、ウェブって、端から端までひとつづきなんだから、ひとつしかないものだろう」
ヒントらしいカード縦列が出た。

「新しいカード」「別の新しいカード」「黒」「さらに別の新しいカード」「刑事」「脱獄囚」

三枚の新しいカードを、三枚とも喚子が解読した。邦治は舌を巻いた。この人、ほんとうに刑事さんと相性がいいな。そして、カードが埋まれば文意は明らかだった。

「速度」「光」「黒」「制約ないし拘束」「刑事」「脱獄囚」

つまり「刑事」と「脱獄囚」は光の速度の制約をうけない存在だ。

どうやら、わかった。邦治は発言した。

「我妻さん。きみは、刑事さんにのりうつられたとき、二年B組の裏サイトを見ていたと言った

ね。そうしたら刑事さんが、マウスに載せたてのひらからきみに入ってきた」

「そう」

邦治は泰弘の顔を正面から見た。「読みは、こうだ。刑事さんはウェブからウェブへ脱獄囚を追ってきた。そして後者のウェブの中でさらに脱獄囚を追いつづけた」

「白」

「つまり、刑事さんと脱獄囚はコンピュータウイルスのようなプログラムだ。インターネット回線の中を動きまわれる」

「白」「黒」

「半分正解、か」邦治は「半分」の意味を少し考えた。「たぶん僕たちが考えるような普通の『プログラム』ではないんだ。その点はあとまわしにして、次の質問。刑事さんと脱獄囚はウェブの中を動きまわれるだけでなく、人間の神経組織に感染することもできる」

「白」

「ちょっと待って」茜がさえぎった。『ウェブからウェブへ』がわからないわ。だって、さっきあなたが言ったように、ウェブってひとつしかないものでしょう」

「地球上にはね」

茜は絶句した。喚子の顔にも驚きの表情が浮かんだ。

「そう。刑事さん。あなたや脱獄囚は、ある文明化された惑星上に構築されたウェブから、他の恒星系にある同じく文明化された惑星のウェブへ、テレポーテーションすることができる」

「白」

「刑事さんたちがそうやってテレポート装置に使えるためには、ウェブはいくつもの条件をみたさなくてはならない。最低でも光回線であるとか、十分な数のサーバーがつながっているとか。そして、たぶんごく最近、地球のウェブはその条件をみたしたんだ。それを察知した脱獄囚がどこかの惑星のウェブから地球のウェブに逃走したので、刑事さんはあとを追ってきた」

「白」

「地球のウェブ上で追いかけることをするうちに、脱獄囚は二年B組の裏サイトから、それを見ていたある人物にのりうつった。だしぬかれた刑事さんは、同じサイトから、それを見ていたもうひとりの人物、つまり我妻さんにのりうつった」

「白」

「そして刑事さんが僕らに求めているのは、捜査協力だ。脱獄囚がのりうつったのは二年B組の誰か、それをつきとめるのを手伝ってくれ、というわけだ」

「白」

「邦治、どうしたの？」茜があきれ顔だ。「いくらあなたでも、これはできすぎよ」

喚子が発言した。「ハル・クレメントの『20億の針』」

「ああ、我妻さん、きみも、読んでいたのか。そのとおり。あんなような話だと思ったんで、ヤマをはったら、当たった」

「読んではない。だけど、有名作品だから、筋は知ってる」

「ちょっと、アウェイ感」茜が割って入った。「推察するに、SFね」

「そう。茜、きみはSFやファンタジーがぜんぜんダメな人だったな。一九五〇年代SFの見本みたいな作品だ。憑依生物の逃亡犯を追って地球にやってきた同じ種族の刑事が、のりうつった相手の少年と協力して、逃亡犯がのりうつった相手が誰かをつきとめる話」

「ちょっと待って」喚子が真顔になった。「刑事さん、その、脱獄囚が、二年B組の誰かにのりうつった、というのは、間違いないの？」

「白」

「刑事さん。あなたは結局私を上書きしなかった。だけど、脱獄囚はどうなの？ 二年B組の誰かを、上書きしてしまったの？」

刑事はこの質問に答えて三枚のカードを出した。

「刑事」「黒」「新しいカード」

新しいカードはたぶん「知識・情報」だ、と邦治は思った。つまり、刑事さんにもそれはわからない。

「あの二十分間、私、ほんとに、こわかった。あなたが入っているために、重苦しい違和感があつて、残り時間がどんどん減っていつて、最後は、今にも自分が消えてなくなるかもしれないって思うといてもたつてもいられなくて」

立ち上がった。たまらず、泣きだした。「あのこわさを味わったあと、ほんとうに、消されてしまった人が、私たちのクラスメートに、いるの？ それは、許せない。そんな、そんな……」

茜が邦治を制して席を立ち、喚子を胸に抱きしめた。邦治がさしのべた手を片手で握り、刑事との接触を維持する。

「我妻さん、あなたの言うとおりよ」邦治に向きなおった。「緊急動議。たった今、校長先生に、電話しましょう。あたしたちは、高校生。人の生き死にかかわる責任を負うことはできないわ。邦治、あなたの出番。この突拍子もない話を、どうしたら信じてもらえるか、頭をしぼって考えて」

「茜、いい判断だ」邦治は大きくうなずいた。「『20億の針』では、のりうつられた少年がしろうと探偵を演じて犯人をわりだすんだが、そんなぬるいことはしてられない。だけど、いいか、茜。ここは笑いものになってもいいんだ。学校や警察が僕たちを相手にせず手をこまぬいていた結果、脱獄囚が大惨事をひきおこしたとしても、その責任は学校や警察にある。だが、笑いものにされるのを恐れて黙っていたら、僕たちの責任になる」

「なるほど、それなら時を移す理由はないわ」茜は喚子を抱きしめたまま、ポケットから生徒手帳を出した。「校長室の外線はこれ、自宅のイエ電はこれ」

カード縦列が出た。

「邦治」「茜」「喚子」「黒」「意思疎通」「新しいカード」「スペース」「緑」「泰弘」「死」

こうくるんじゃないかとは思ってた、と邦治は脳内でひとりごちた。六枚目の新しいカードは「公権力」か「治安当局」だろう。お前たちはその筋に通報するな、さもなくば泰弘の命はないぞ、だ。

しっかし！ あの『20億の針』の温厚な刑事とのこの落差はなんだ。こいつ、宇宙のジャック・バウアーか。

「邦治、とても可愛いことを、言わせてもらおうわ」沈鬱ちんうつな顔を作って、茜が言った。「たった今、このことを学校や警察に知らせる、という社会的な義務があたしたちにはある。その義務は、もしかすると、泰弘くんの命より、重いかもしれない」

茜に抱かれた喚子の顔色が変わった。

いや、我妻さん、そうじゃないんだ。邦治は思った。いいぞ、茜、刑事さんにプレッシャーをかけにかかったな。人質事件の交渉人、やれるじゃないか。よし、ここは引っぱるぞ。

一分ほども黙ったあとで、邦治は言った。

「茜。ここは人質の近親者としての僕に免じて、学校や警察に通報するかしないかの決定を、とりあえず二十四時間先送りしないか」

「邦治。総じていうと、あなたはお人好しよ。交渉ごとはまかせられない」氷のような声で茜が言った。「でも、その判断に限っては悪くない。冷たいようだけれど、二年B組の誰かの上書きは、起こったとしたらすでに起こってしまったことで、今からはとりかえしがつかない。とすれば、明日の朝二年B組がどうなっているか見てから決めてもおそくはない」

茜のこのこわもて発言に、ついに喚子がたまりかねた。ハグをのがれながら邦治に訴えた。

「二年B組の、ある特定のひとりの、安否を確かめたいの。たった今、電話しちゃダメ？」

茜が質問した。

「我妻さん、あなたは今その人に電話する具体的な用件がある？」

「ない」

「日ごろから、夜のこの時間にその人と電話で話したりメールを交換したりする習慣がある？」

「ない」

「それならダメよ」

「そう、ダメだ。もし万が一きみが電話するその相手が、脱獄囚がのりうつった本人だったらどうなる？ 脱獄囚はきみに疑惑を抱く。そしてきみを拷問にかけるかして、刑事さんの居所を白状させる。法執行者である刑事さんでさえ人質をとって脅迫してくるんだ。法の埒外にある脱獄囚ときたら何をするか知れたものじゃない。そう思つて、茜も、僕も、我慢してるんだ」

喚子はしぶしぶ納得した。邦治は喚子と茜に着席をうながし、重ねて言った。「茜、もうひとつ動議だ。議題二に入る前に、刑事さんに確かめておきたいことがある」

「議題二も、時間、かかるわよ。それでも、必要？」

「だと思ふ」

「言ってみて」

「刑事さん」邦治は泰弘に向きなつた。「あなたと、脱獄囚は、もしかすると人間を操作して、思い通りに動かせるんじゃないか」

「白」「黒」

「また『半分正解』か。『思い通りに』が違うのかな。大きな制約はあるが、操作することはで

きる」

「白」

茜が顔面蒼白になった。「なぜ、そう思ったの」

「だって、この伝達方法、刑事さんはきつかけを出すだけで、実際に検索の仕事をしているのは僕たちの方だもの。つまりこの伝達自体が、精神操作なんだよ。同じようにきつかけを出して、ほかのことをさせることもできるはずだ。それだけじゃない」

泰弘にむかって言った。

「カードが検索しているのは僕たちの記憶だから、記憶操作もできるのじゃないか。記憶を、検索したり、消したり、改竄^{かいざん}したり」

「白」「黒」

「大きな制約はあるが、操作することはできる」

「白」

「たぶんその『大きな制約』には身体的接触がかかわっている。一度も身体にさわったことのない相手の行動や記憶を、あなたは操作することができますか」

「黒」

「善福寺川緑地公園で、我妻さんに触れたとき、てのひらがちよつとピリツときた。そのときを境にして僕たちはカードが見えるようになった。あのとき刑事さんは、僕たちに何かを入れたんだ。我妻さんにも同じものを残した。それが入っていることが、あなたがその人を操作するため

の条件だ」

「白」

「その人にさわっていなくても、遠隔操作できる」

「白」「黒」

「この『半分正解』、今度は難解だな」邦治は三十秒ほど考えた。「こうかな。僕たちに入れた通信機に、遅れて作動するプログラムを載せることができる。一定時間が経過したり、特定の条件がみたされたりすると、その通信機が僕たちの行動や記憶を操作する」

「白」

茜が、熱いものにでも触れたように卓上から手をひっこめた。

「気持ちわかるが、茜、手を戻さないときみの言うことは刑事さんに伝わらないよ」

「邦治、あなた、よく、平気ね」茜は心底動揺しているようだ。「最小限、約束をとりつけて。

あたしたちの行動と記憶を操作しないって。そうでないとあたしはもう刑事さんと意思疎通しない」

「わかった。刑事さん、茜の言ったことはこうだ」伝言した。八枚のカード縦列が出た。

「刑事」「新しいカード」「刑事」「黒」「別の新しいカード」「茜」「邦治」「喚子」

新しいカードがそれぞれ「約束」「操作」であることは間違いなかった。「約束すると言ってる」茜がおそろおそろ手を戻し、カードを確認した。しかし、やはり首を振った。

「邦治、あなたがどうして平気でいられるか、わからないわ。記憶を操作されるかもしれないっ

てことは、確かな現実が何ひとつなくなるってことなのよ。くつきり覚えてる過去も、はつきり見えている現在も、実は刑事さんのつくったにせものかもしれない。あたしたちは、あたしたち自身に対して『信用できない語り手』になっちゃうの。そんなポストモダン小説みたいな生活、あたしには耐えられないわ」

泰弘にむかって「刑事さん、せっかく約束してくれたけど、やっぱりダメ。たった今あたしから、その通信機だか何だかを、抜きとって」

カードがにべもなく即答した。「刑事」「黒」「承諾」

「マジで言ってるの。今すぐ、とって」

「刑事」「約束」「刑事」「黒」「操作」「茜」

「それでも、いや」

「刑事」「新しいカード」「茜」

この新しいカードを読み解いたのは、また喚子だった。「『必要とする』だと思っわ」

邦治は内心で思った。告白かよ！

刑事はさらにかぶせた。「刑事」「邦治」「泰弘」「喚子」「必要とする」「茜」

「いつの間に、あたしたちチームになったのよ！」茜がきめつけた。「人質をとって協力を迫っている立場のくせに」

しかし茜の語気は弱まった。邦治は思った。すげーな、刑事。茜のいちばんの泣きどころをこの短時間に見ぬいちゃったかも。

「わかった。それじゃ、この件も二十四時間先送り。でも、その時点であたしの意志が変わってなかったら、かならず取ってもらうからね」

あらららら、と邦治は思った。茜、死亡フラグって、聞いたことないか？　今、きみ、みごとに一本、ぶっといやつを立ててしまったぞ。

「だけど、今の新情報で、学校や警察に通報する必要性は、さらに増したと思うわ。あたしに整理させて」

茜は質した。「刑事さん、脱獄囚は、あなたが自分を追って、二年B組の誰かにのりうつただろうと、かなり高い確度で予想しているのね」

「白」

「こちらが脱獄囚の、その、保菌者キャリアーをつきとめるより先に、向こうが刑事さんのキャリアーが泰弘くんだとつきとめることもありうるわけね」

「白」

「脱獄囚は、その、遅れて作動するプログラムを使うやり方で、たくさんの人間を操作できるわね。何十人に武器をもたせて、いっせいに泰弘くんを襲いかからせることもできる」

「白」

「泰弘くんが死んだら、あなたはどうなるの。あなたが活動するには、キャリアーの神経組織が生きている必要があるわよね」

「白」

「ウェブ端末が近くにあれば、その中に逃げこむとして、なかったらどうなるの。あなたも死ぬの？」

「白」「黒」

「つまり、死に準じるような、かなり困った状態になるわけね」

「白」

「そのことで脱獄囚はあなたから逃げのびる大きなチャンスを得る」

「白」

「だから、脱獄囚には、泰弘くんをつきとめて殺す十分な動機がある。証明終わり。邦治、これはものすごく危険なゲーム。手を出したらあなたは泰弘くんの命を深刻な危険にさらすことになるわ」

「そうだな」

「あたしならこのゲームをどうプレーするか、ききたい？」

「ぜひききたい」

「たった今、公権力を行使して、今夜のうちにあたしたち以外の二年B組の生徒三五人全員の自宅を急襲、家族ともども身柄を確保して、別々に隔離して監禁するの。さらに、身柄確保のときに被疑者にちよつとでも触れた警察官も拘束して監視下におく。そうしておいて、何カ月でも訊問をつづけ、尻尾を出すまで待つよ。いい、これはそういう性格のゲームなの」

茜を見る我妻喚子の顔に、ほとんど怯えに近い表情が浮かぶのを邦治は見とった。我妻さん、

引かないでやってくれ。茜は昔から、いったん火がつくととまらないんだ。

「よくわかった。肝に銘じる」邦治は言った。「だが、その泰弘がいま現に刑事さんの人質にとられているんだ。二十四時間先送り、というさっきの結論を修正する必要はないと思う」

「そうなるわね」茜はうなずいた。「それでは、最後。刑事さん、教えて。あなたたちが『上書き』した人間には、何か特徴があるの？」

五枚のカードが出た。「新しいカード」「脱獄囚」「黒」「意思疎通」「別の新しいカード」

「一枚目のカードはわかる。『宿主』^{ホスト}ないし『保菌者』^{キリヤー}だ。最後が難しい。すごく抽象的な概念だ。刑事さん、もう少し具体的に言い換えられないか」

「キャリアー」「脱獄囚」「黒」「新しいカード」

今度はわかった。「話す」だ。人間は上書きされると、口がきけなくなる。するとさっきの抽象的なカードは『言語』だ。会話だけじゃなく、筆談も、手話もだめなんだ」

「ちょっと拍子抜け」茜がちよっと口をとがらせた。「虚々実々の腹のさぐり合いになるのかと思ってたわ。それじゃ一目瞭然、ごまかしようがないじゃない」

「考えてみればあたりまえだ。刑事さんは今僕らの思考をじかに読んで受け答えしている。テレパシーで意思疎通できる知性に言語能力が発達するはずはない」

「さて」茜が言った。「議事を進行します。議題一は今日のところは以上で終了。議題二に移ります。いいですか」異議はなかった。

「議題二、我妻さんの現状評価と対策」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。